

縁結び

泉鏡花

青空文庫

ふすま
襖を開けて、旅館の女中が、

「旦那、」

と上調子の尻上りに云つて、坐りもやらず莞爾と笑いかける。

「用かい。」

とこの八畳で応じたのは三十ばかりの品のいい男で、紺の勝つた糸織の大名縞の袷に、浴衣を襲ねたは、今しがた湯から上つたので、それなりではちと薄ら寒し、着換えるも面倒なり

で、みだればこ箱たにた畳たんであつた着物を無造作に引摺出して、上着ひきずりだだけ引剥ひっぱいで着込きこんだ証拠しょうこに、襦袢じゆばんも羽織とこも床の間まをすべつて、すわりぶとん坐蒲団わきの傍ちりちりまで散々ちりちりのしだらなさ。帯もぐるぐる巻き、胡坐あぐらひばち火鉢ほおづえに頬杖ほおづえして、当日しののめごらんの東雲御覧しののめごらんという、ちよつと變つた題の、土地の新聞を讀んでいた。

その二の面の二段目から三段へかけて出ている、きよかわけんぞうし清川謙造氏講演、とあるのがこの人物である。

たとい地方でも何でも、新聞は早朝に出る。その東雲御覧を、今やこれ午後二時。さるにても朝寝あさねのほど、昨日きのうのその講演会のかえり帰途はかのほども量はかられる。

「お客様でございますよう。」

と女中は思入おもいいれ たつぷりの取次を、ちつとも先方気が着かず

で、つい通りの返事をされたもどかしさに、声で威おどして甲走かんばしる。

吃驚びっくりして、ひよいと顔を上げると、横合から硝子窓がらすまどへ照てらて

々らと当る日が、片頬かたほおへかっと射したので、ぱちぱちと瞬またたいた。

「そんなに吃驚なさいませんが、でもようございます。」

となおさら可笑おかしがる。

謙造は一向真面目まじめで、

「何という人だ。名札はあるかい。」

「いいえ、名札なんか用いりません。誰だれも知らないものがない方で

ございます。ほほほ、」

「そりや知らないものがない人かも知れんがね、よそから来た私

にや、名を聞かなくつちや分らんじやないか、どなただよ。」

と眉まゆを顰ひそめる。

「そんな顔をなすつたつてようございます。ちつとも恐こわくはあり
ませんわ。今にすぐにニヤニヤとお笑いなさろうと思つて。昨夜ゆうべ
あんなに晩おそうくお帰りなさいました癖くせに、」

「いや、」

と謙造は片頬かたほを撫なでて、

「まあ、いいから。誰だというに、取次がお前、そんなに待たし
ておいちや失礼だろう。」

ちと躡たしなめるように言うと、一層頬ほっぺた辺の色を濃こくして、ますま
す氣勢きお込んで、

「何、あなた、ちつと待たして置きます方がかえつていいんでございますよ。昼間ツからあなた、何ですわ。」

と厭いやな目つきでまたニヤリで、

「ほんとは夜来る方がいいんだのに。フン、フン、フン、フン、」

突然いきなり川柳せんりゆうで折紙おりがみつきの、（あり）という鼻をひこつか

せて、

「旦那、まあ、あら、まあ、あら良いにお香かい、何なて香かう水すいを召めしたんでございます。フン、」

といい方が仰ぎょう山さんなのに、こっちもつい釣つり込まれて、

「どこにも香水なんぞありはしないよ。」

「じゃ、あの床の間の花かしら、」

と一ひときわ 際首を突込みながら、

「花といえは、あなたおあい遊ばすのでございましょうね、お通し申ししてもいいんですね。」

「串じょうだん 戯 じゃない。何という人だというに、」

「あれ、名なんぞどうでもよろしいじゃありませんか。お逢あいな
されば分るんですもの。」

「どんな人だよ、じれつたい。」

「先方さきもじれつたがっておりましょうよ。」

「婦人おんなか。」

と唐突だしぬけに尋ねた。

「ほら、ほら、」

と袂たもとをその、ほらほらと煽あおつてかかつて、

「ご存じの癖に、」

「どんな婦人だ。」

と尋ねた時、謙造の顔がさつと暗くなった。新聞を窓まどへ翳かざしたのである。

「お気の毒様。」

二

「何だ、もう帰ったのか。」

「ええ、」

「だつてお気の毒様だと云うじやないか。」

「ほんとに性急せつかちでいらつしやるよ。誰も帰つたとも何とも申上げはしませんのに。いいえ、そうじやないんですよ。お気の毒様だと申しましたのは、あなたはきつと美しい※ねえさんだと思つておいでなさいましょう。でしよう、でしよう。

ところが、どうして、跛びっこで、めっかちで、出尻でっちりで、おまけに

、
「

といいかけて、またフンと嗅かいで、

「ほんとにどうしたら、こんな良いい匂においが、」

とひよいと横を向いて顔を廊下ろうかへ出したと思うと、ぎよツとしたように戸口を開いて、斜はすツかけに、

「あら、まあ！」

「お伺い下すつて？」

と内端ながら判然とした清い声が、壁に附いて廊下で聞える。女中はぼつとした顔色で、

「まあ！」

「お帳場にお待ち申しておりますんですけども、おかみさんが二階へ行つていいから、とそうおつしやつて下さいましたもんですから……」

と優容な物腰。大概、荅から咲きかかつたまで、花の香を伝えたから、跛も、めつかちも聞いたであろうに、忖なく笑いもせなんだ、つつましやかな人柄である。

「お目にかかれますでしょうか。」

「ご勝手になさいまし。」

くるりと入口へ仕切られた背中になると、襖の棧さんが外はずれたように、その縦縞たてじまが消えるが疾はやいか、廊下を、ばた、ばた、ばた、どたんなり。

「お入んなさい、」

「は、」

と幽かすかに聞いて、火鉢に手をかけ、入口をぐつと仰あおいで、優やさしい顔で、

「ご遠慮えんりよなく……私は清川謙造です。」

と念のために一ツ名乗る。

「(づ)免下さいまし、」

はらりと沈んだ衣の音で、早入口へちやんと両手を。肩がしなやかに袂の尖、揺れつつ畳に敷いたのは、藤の房の丈長く末濃に靡いた装である。

文金の高髻ふつくりした前髪で、白茶地に秋の野を織

出した繻珍の丸帯、薄手にしめた帯腰柔に、膝を入口に支いて

会釈した。背負上げの緋縮緬こそ脇あけを漏る雪の膚に稲

妻のごとく閃いたれ、愛嬌の露もしつとりと、ものあわれ

に俯向いたその姿、片手に文箱を捧げぬばかり、天晴、風采、

池田の宿より朝顔が参つて候。

謙造は、一目見て、紛うべくもあらず、それと知つた。

この芸妓は、昨夜の宴会の余興にとて、催しのあつた熊野の踊に、朝顔に扮した美人である。

女主人公の熊野を勤めた婦人は、このお腰元に較べていた

く品形が劣つていたので、なぜあの瓢箪のようなのがシ

テをする。根占の花に蹴落されて色の無さよ、と怪んで聞くと、

芸も容色も立優つた朝顔だけれど、——名はお君という——

その妓は熊野を踊ると、後できつと煩らうとの事。仔細を聞くと、

させる境遇であるために、親の死目に合わなかつたからであ

ろう、と云つた。

不幸で沈んだと名乗る淵はないけれども、孝心など聞けば懐しい流れの花の、旅の衣の俵に立つたのが、しがらみかかる部屋の

入口。

謙造はいそいそと、

「どうして。さあ、こちらへ。」

と行儀ぎようぎわるく、火鉢ななを斜ななめに押出おしだしながら、

「ずっとお入んなさい、構かまやしません。」

「はい。」

「まあ、どうしてね、お前おどろさん、驚おどろいた。」と思わず云つて、心

着くと、お君はげつそりとまた姿やが瘦やせて、極きまりの悪そうに小さくなつて、

「済みませんこと。」

「いやいや、驚おどろいたつて、何に、その驚おどろいたんじやない。ははは

は、吃驚びっくりしたんじやないよ。まあ、よく来たねえ。」

三

「その事で。ああ、なるほど言いましたよ。」

と火鉢の縁ふちに軽く肱ひじを凭もたせて、謙造は微笑ほほえみながら、

「本来なら、こりやお前さんがたが、客へお世辞せじに云う事だったね。誰かに肖にていらつしやるなぞと思わせぶりを……ちと反対あちこちだったね。言いました。ああ、肖にている、肖にているツて。

そうです、確たしかにそう云った事を覚えてるよ。」

お君は敷しけと云つて差出された座蒲団ざぶとんより膝薄ひざうすう、その傍かたわらへ

片手をついたなりでいたのである。が、うすげしよう薄化粧に、くちべにこ口紅濃く、目のぱつちりした顔を上げて、

「よその方が、誰かに肖ているとお尋ねなさいましたから、あなたはどうお返事を遊ばすかと存じまして、私はきまり極が悪うございましてけれども、そつと気をつけましたんですが、こういう処で話をする事ではない。まあまあ、とおつしやつて、それ切りになりましたのでございます。」

謙造は親しげに打うちうなず頷き、

「そうそうそう云いました。それが耳に入つて気になったかね、そうかい。」

「いいえ、」とまた俯向いて、清らかな手巾ハンケチを、袂の中で引ひきな

靡^びけて、

「氣にいたしますの、なんのつて、そういうわけではございません。あの……伺^{うかが}いました上で、それにつきまして少々お尋^{たず}ねしたいと存^{ぞん}じまして。」と俯^{ふしめ}目^めになつた、睫^{まつげ}毛^げが濃い。

「聞^ききましたようにも。その肖^{さう}たという事^{こと}の次^{つぎ}策^{さく}を話^わすがね、まあ、もつとお寄^よんなさい。大^{だい}分^{ぶん}眩^{まぶ}しそ^うだ。どうも、まともに日^ひが射^さすからね。さあ、遠^{とほ}慮^りをしな^いで、お敷^敷きなさい。こうして尋^{たず}ねて来^きなすつた時^{とき}はお客^{きやく}様^{やう}じやないか。威^い張^{ばう}つて、威^い張^{ばう}つて。」

「いいえ、どういたしまして、それでは……」

しかし眩^{まば}ゆか^つた^{らう}、下^{した}搔^がを引^ひいて座^ざをず^らした、壁^{かべ}の中^な央^{かば}に柱^{むら}が許^{もと}、肩^{かた}に浴^あびた日^ひを避^よけて、朝^あ顔^{がほ}はらりと咲^さきかわりぬ。

「実はもうちつと間まがあると、お前さんが望みとあれば、今夜にもまた昨夜ゆうべの家へ出向いて行つて、陽氣に一つ話をするんだがね、もう東京へ発程たつんだからそうしてはいられない。」

「はい、あの、私もそれを承りましたので、お帰りになりません前さきと存ぞんじまして、お宿へ、飛とんだお邪魔じゃまをいたしましてございますの。」

「宿へお出いでは構わんが、こんな処で話してはちと真面目になるから、事が面倒めんどうになりはしないかと思ふんだが。」

そうかと云つて昨夜ゆうべのような、杯盤はいばん狼藉ろうぜきという場所も困こまるんだよ。

実は墓参詣はかまいりの事だから、

と云いかけて、だんだん火鉢をてもと手許へ引いたのに心着いて、一

膝下つて向うへお圧して、

「お前さん、煙草たばこは？」

だま黙つて莞爾にっこりする。

「喫のむだろう。」

「生意氣なまいきでございますわ。」

「遠慮なしにお喫あがり、お喫り。上げようか、巻いたんでよけりや

。」

「いいえ、持つておりますよ。」

と帯の処へ手を当てる。

「そこでと、湯も沸わいてるから、茶を飲みたければ飲むと……羊よ

うかん
 羹がある。一本五錢ぐらいなんだが、よければお撮みと……今
 に何ぞご馳走しようが、まあ、お尋の件を済ましてからの事にし
 よう、それがいい。」

ひと
 独りで云つて、独りで極めて、

「さて、その事だが、」

「はあ、」

とまた片手をついた。胸へ気が籠つたか、乳のあたりがふつ
 りとなる。

「余り気を入れると他愛がないよ。ちつとこう更つては取留め
 ない事なんだから。いいかい、」

ともの優しく念を入れて、

「私は小児の時だったから、睡をつけて、こう引返すと、台なしに汚すと云つて厭がったつけ。死んだ阿母が大事にしていた、絵も、歌の文字も、対の歌留多が別にあつてね、極彩色の口絵の八九枚入った、綺麗な本の小倉百人一首というのが一冊あつた。

その中のね、女用文章の処を開けると……」と畳の上で、謙造は何にもないのを折返した。

四

「トそこに高髻に結つた、瓜核顔で品のいい、何とも云えない

ほど口許くちもとの優やさしい、目の清すずしい、眉まゆの美うつくしい、十八九ふりそでの振袖ふりそでが、
 裾すそを曳ひいて、嫋娜すらりと中腰ちゅうように立つて、左の手を膝ひざの処ところへ置いて、右
 の手で、筆ふでを持った小児こどもの手を持添もえて、その小児こどもの顔かほを、上か
 ら俯目ふしめに覗のぞきこ込こむようにして、莞爾にっこりしていると、小児こどもは行儀ぎよよ
 く机つくえに向むかつて、草紙くさしに手習てならのところなんだがね。

今いまでも、その絵えが目に着あっている。衣服きものの縞柄しまがらも真まことにしなや
 かに、よくその膚はだ合あいに叶かなったという工合くわいごうで。小児こどもの背せ中に、そ
 の膝ひざについた手の仕切しきりがなかつたら、膚はだへさぞ移うつり香かほもするだろ
 うと思うように、ふつくりとなだらかに棲つまを捌さばいて、こう引廻ひきまわ
 した裾すそが、小児こどもを庇かばったように、しんせつに情じょうが籠こもっていたんだ
 よ。

おおげさ
大袈裟に聞えようけれども。

私は、その絵が大好きで、開けちや、見い見いしたもんだから、百人一首を持出して、さつと開くと、またいつでもそこが出る。

この※さんは誰だい？と聞くと阿母が、それはお向うの※さんだよ、と言いいいしたんだ。

そのお向うの※さんというのに、……お前さんが肖にているんだがね——まあ、お聞きよ。」

「はあ、」

と睜みはった目がうつくしく、その倂おもかげが映りそう。

「お向うというのは、前に土蔵どぞうが二戸前ふたとまえ。格子戸こうしどに並ならんでいたたいけ大家たいけでね。私の家なんぞとは、すっかり暮向きちがが違ちがう上に、金貸

だそうだったよ。何となく近所との隔へだてがあつたし、余り人づきあいをしないといった風で。出入も余計なし、なおさら奥行が深くつて、裏はどここの国まで続いているんだか、小児心こどもごころには知れないほどだったから、ついで遊びに行つた事もなければ、時々、門口じゃ、その※さんねえというのの母親に口を利かれる事があつても、こつちは含羞はにかんで遁にげ出したように覚えている。

だから、そのお嬢さんじょうなんざ、年とし紀も違ちがうし、一所いしょに遊んだ事はもちろんなし、また内気な人だったとみえて、余り戸外そとへなんか出た事のない人でね、堅かたく言えば深閨しんけいに何とかだ。秘蔵娘ひぞつこさね。

そこで、軽々しく顔が見られないだけに、二度なり、三度なり

見た事のあるのが、余計に心に残っているんで。その女用文章の

中の挿画さしえが真物ほんものだか、真物が絵なんだか分らないくらいだった。

しかしどつちにしろ、顔容かおかたちは判然はつきり今も覚えている。一日あるひ、

その母親の手から、娘むすめが、お前さんに、と云つて、縮緬ちりめんの寄よせぎ

切れで拵こしらえた、迷子札まいごふだにつける腰巾着こしぎんちやくを一個ひとつくれたんです。

そのとき格子戸わきの傍わきの、出窓すだれの簾すだれの中に、ほの白いものが見えた

よ。紅べにの色いろも。

蝙蝠こうもりを引ひ払ばたいていた棹さおを抛ほうり出して、内うちへ飛と込んだ、その

嬉うれしさツたらなかつた。夜も抱かかいて寝ねて、あけるとその百人一首

の絵の机の上へのついたり、立たっている娘の胸の処ところへ置おいたり、

胸へのせると裾すそまでかくれたよ。

惜おしい事をした。その巾着は、私が東京へ行っていた時分に、故郷きようの家が近火きんかに焼けた時、その百人一首も一所に焼けたよ。」

「まあ……」

とはかなそうに、お君の顔色が寂さびしかった。

「迷子札は、金かねだから残ったがね、その火事で、向うの家うちも焼けたんだ。今度通つてみたが、町はもう昔の俤もない。煉瓦れんが造り

なんぞ建つて開けたようだけれど、大きな樹がなくなつて、山がすぐ露出むきだしに見えるから、かえつて田舎いなかになつた気がする、富士の裾野すそのに煙突えんとつがあるように。」

向うの家も、どこへ行きなすつたかね、」

と調子が沈んで、少し、しめやかになつて、

「もちろんその娘さんは、私がまだ十ウにならない内に亡くなつたんだ。――」

産後だと言います……」

「お産をなすつて？」

と俯目でいた目を睜みひらいたが、それがどうやらうるんでいたので。

謙造はじつと見て、傾かたむきながら、

ひとりむすめ

「一人娘で養子をしたんだね、いや、その時は賑にぎやかだツけ。」
と陽気な声。

五

「土蔵がずツしりとあるだけに、いつも火の気のないような、しんとした、大きな音じや釜かまも洗わないといった家が、夜になると、何となく灯あかりがさして、三味線しみせん太鼓たいこの音がする。時々どつと山やまお風ろしに誘われて、物凄ものすごいような多人数たにんずの笑わらいごえ声こゑがするね。

何ツて、母親おふくろの懐ふところで寝ながら聞くと、これは笑っているばかり。父親おやじが店から声をかけて、魔物が騒ぐんだ、恐こわいぞ、と云うから、乳へ顔を押おツつ着けて息を殺して寝たつけが。

三晩みばんばかり続いたよ。田地でんじ田畠でんばた持もち込こみで養子が来たんです。

その養子というのは、日にやけた色の赤黒い、巖がんじょう乗しょうづくりの小造こづくりな男だつけ。何だか目の光る、ちときよときよとする、性せつかち急かちな人さ。

性せつ急かちなことをよく覚えてゐる訳は、桃ももを上げるから一所においで。
 ※ねえさんが、そう云つた、坊ぼうを連れて行けというからと、私を誘つてくれたんだ。

例の中着をつけて、いそいそ手を曳ひかれて連れられたんだが、髪きを綺麗きれに分けて、帽子ぼうしを冠かぶらないで、確かその頃流行はやつたらしい。手て甲こ見たつこうような、腕うでへだけ嵌はまる毛糸もえぎで編あんだ、萌黄もえぎの手袋てぶくろを嵌はめて、赤あかい襦じゆ衣つを着きて、例の目を光あらしていたのさ。私はその娘むすめさんが、あとから来るのだろう、来るのだろうと、見返みかへり見返みかへりしながら手を曳ひかれて行つたが、なかなか路みちは遠とほかつた。
 途中で負おつてくれたりなんぞして、何でも町まち尽はずへ出でて、寂さびい処ところを通とおつて、しばらくすると、大きな榎えのきの下したに、清しみず水みづが湧わいて

いて、そこで冷い水を飲んだ気がする。清水には柵さくが結ゆつてあつてね、昼間だったから、点つけちやなかつたが、床しょうぎ几ぎの上に、何とか書いた行燈あんどんの出ているのを覚えている。

そこでひとしきり、人通りがあつて、もうちと行くと、またひとつそりして、やがて大きな桑くわばたけ畠はたけへ入つて、あの熟じゆくした桑の実を取つて食べながら通ると、二三人葉を摘つんでいた、田舎いなかの婦人があつて、養子を見ると、慌あわてて襷たすきをはずして、お辞儀じぎをしたがね、そこが養子の実家だった。

地続きの桃もも畠はたけへ入ると、さあ、たくさん取れ、今じゃ、※ねえさんのものになつたんだから、いつでも来るがいい。まだ、瓜うりもある、西瓜すいかも出来る、と嬉うれしがらせて、どうだ。坊こは家の児うりにな

らんか、※^{ねえ}さんがいい児にするぜ。

厭^{いや}か、爺^{じじ}婆^{ばば}が居^いるから。……そうだろう。あんな奴は、今に

おれがたたき殺してやろう、と恐ろしく意気込んで、飛上つて、

高い枝^{えだ}の桃^{もも}の実^みを引^{ひん}もぎつて一個^{ひとつ}くれたんだ。

帰途^{かえり}は、その清水^{しみず}の処^{ところ}あたりで、もう日が暮^くれた。婆^{ばば}がやかま

しいから急^{いそ}ごう、と云うと、髪^{かみ}をばらりと振^ふつて、私の手^てをむず

と取^とつて駆^{かけ}出したんだが、引^ひ立てた腕^{うで}が挽^もげるように痛^{いた}む、足^{あし}も

宙^{ちゆう}で息^{いき}が詰^{つま}つた。養^{やしやう}子は、と見ると、目^めが血^ち走^はつていようじやな

いか。

泣^な出したもんだから、横^{よこ}抱^{だき}にして飛^とんで帰^{かえ}つたがね。私^{わたし}は何

だか顔^{かほ}はあかし、天^{てん}狗^くにさらわれて行^いつたような氣^きがした。袂^{たもと}に

入れた桃の実は途中で振落して一つもない。

そりやいいが、半年経たない内にその男は離縁になつた。

だんだん気が荒くなつて、※さんのたぶさを掴んで打つた、とかで、田地は取上げ、という評判でね、風の便りに聞くと、

その養子は気が違つてしまつたそうだよ。

その後、晩方の事だつた。私はまた例の百人一首を持出して、

おなじ処を開けて腹這いで見ていた。その絵を見る時は、きつと、

この※さんは誰？ と云つて聞くのがお極りのようだつたがね。

また尋ねようと思つて、阿母は、と見ると、秋の暮方の事だ

つけ。ずっと病気で寝ていたのが、ちと心持がよかつたか、床を

出て、二階の臂かけ窓に袖をかけて、じつと戸外を見てうつとり

見惚みとれたような様子だから、遠慮えんりよをして、黙もくつて見ていると、
 どうしたか、ぐツと肩を落して、はらはらと涙なみだを落した。

どうしたの？ と飛とついて、鬢びんの毛のほつれた処へ、私の頬ほおが
 くつついた時、と見ると向うの軒のきした下に、薄く青い袖をかさねて、
 しょんぼりと立って、暗くくなった山の方を見ていたのがその人で

、
 ー

と謙造おもてそむは面を背けて、硝子窓がらすまど。そのおなじ山が透すかして見え
 る。日は傾かたむいたのである。

六

「その時は、艶々つやつやした丸鬘まげに、浅葱絞あさぎしぼりの手柄てがらをかけていなすつた。ト私が覗のぞいた時、くるりと向うむきになつて、格子戸へ顔をつけて、両袖でその白い顔を包んで、消えそうな後姿で、ふるえながら泣なきなすつたつけ。

桑の実の小母おぼさん許とこへ、※ねえさんを連れて行つてお上げ、坊ぼうやは知つてるね、と云つて、阿母おふくろは横抱よこかかに、しつかり私を胸へ抱いて、

こんな、お腹をして、可哀相かわいそうに……と云うと、熱たまい珠たまが、はらはらと私の頸くびへ落ちた。」

と見ると手巾ハンケチの尖さきを引ひき脚くわえて、お君きみの肩はぶるぶると動いた。白齒しらはの色も涙なみだの露つゆ、音おのするばかり戦たたかいて。

ことば
言を折られて、謙造は溜息ためいきした。

「あなた、もし、」

と涙声で、つと、腰こしを浮うかして寄つて、火鉢にかけた指の尖が、真白ましろに震ふるえながら、

「その百人一首も焼けてなくなつたんでございますか。私わ、私わたしは、お墓もどこだか存じません。」

と引出して目に当てた襦じゆばん袷あはせの袖の燃ゆる色も、紅寒くれなゐき血に見える。

謙造は太息といきついて、

「ああ、そうですね、じゃあ里に遣やられなすつたお娘こなんですね。音信いんしん不通ふつうという風説だったが、そうですね。——いや、」

ことば
と言を改めて、

「二十年前の事が、今日の前に見えるようだ。お察し申します。

私も、その頃阿母おふくろに別れました。今じや父親おやじも居おらんです

が、しかしまあ、墓所はかしよを知っているだけでも、あなたより増ましか

も知れん。

そうですか。」

また歎息して、

「お墓所もご存じない。」

「はい、何にも知りません。あなたは、よく私の両親の事をご存
じでいらつしやいます、せめて、その、その百人一首でも見とう

ござんすのにね。……」

ことば
と言も乱れて、

「墓おほかの所をご存じではござんすまいか。」

「……困ったねえ。門徒宗もんとしゅうでおあんなすつたつけが、トばかり

じゃ……」

と云い淀よどむと、堪たまりかねたか、蒲団ふとんの上へ、はつと突俯つツぷして泣

くのであつた。

謙造は目を瞑ねむつて腕組したが、おお、と小さく膝ひざを叩たたいて、

「余りの事のお気の毒さ。肝心かんじんの事を忘れました。あなた、あ

なた、」

と二ふた一こえ声こえに、引起された涙の顔。

「こつちへ来てご覧なさい。」

謙造は座を譲つて、

「こつちへ来て、ここへ、」

と指さされた窓の許へ、お君は、夢中のように、つかつか出て、硝子窓の敷居しきいに縫すがる。

謙造はひしと背後うしろに附つき添そい、

「松葉越まつばごしに見えましよう。あの山は、それ茸狩たけがりだ、彼岸ひがしだ、

二十六夜待やまちだ、月見だ、と云つて土地の人が遊山ゆさんに行く。あなた

も朝夕見ていませう。あすこにね、私の親たちの墓があるんだ

が、その居いまわりの回向堂えこうどうに、あなたの阿母おつかさんの記念かたみがある

。

「ええ。」

「確たしかにあります、一昨日も私が行つて見て来たんだ。そこへこれからお伴ともをしよう、連れて行つて上げましょう、すぐに、」

と云つて勇いさんだ声で、

「お身体からだの都合つごうは、」

その花やかな、寂さみしい姿をふと見つけた。

「しかし、それはどうとも都合つごうが出来よう。」

「まあ、ほんとうでございますか。」

といそいそ裳もすそを靡なびかしながら、なおその窓を見入つたまま、敷居の手を離さなかつたが、謙造が、腕ぬぎ棄すてた衣服きものにハヤ手をかけた時であつた。

「あれえ」と云うと畳にばつたり、膝を乱して真ま蒼さおになつた。

窓を切った松の樹の横枝へ、お君の顔と正面に、山を背負つて、
 むずと掴つかまった、大きな鳥の翼つばさがあつた。狸たぬきのごとき眼まなこの光、灰
 色の胸毛さかだの逆立さかだつたのさえ数えられる。

「梟ふくろうだ。」

とからからと笑つて、帯をぐるぐると巻きながら、

「山へ行くのに、そんなものに驚おどいちやいかんよ。そう極きまつたら、
 急いそがないとまた客が来る。あなた支度したくをして。山の下まで車だ。」
 と口でも云えば、手も叩く、謙造けんぞうの忙いそがしき。その足許あしもとにも鳥
 が立とう。

七

「さつききの、さつききの、」

と微笑ほほえみながら、謙造は四辺あたりを睜みまわし、

「さつきのが……声だよ。お前さん、そう恐こわがつちやいかん。一いつしょうけんめい、生懸命なまかけのみことのところじゃないか。」

「あの、梟が鳴くんですかねえ。私はまた何でしょうと吃驚びっくりしましたわ。」

と、寄添よりそいながら、お君も莞爾にっこり。

二人は麓ふもとから坂を一ツ、曲つてもう一ツ、それからこの天神の宮を、梢こずえに仰あおぐ、石段を三段、次第に上つて来て、これから隧ト道ンネルのように薄暗い、山の狭間はざまの森の中なる、額堂かくどうを抜けて、

見晴しへ出て、もう一坂越して、草原を通ると頂上の広場になる。かしこの回向堂を志して、ここまで来ると、あんなに日当りで、車は母衣ほろさえおろすほどだったのが、梅雨期つゆどきのならい、石段の下の、太鼓橋たいこばしが掛かつた、乾かわいた池の、葉ばかりの菖蒲あやめがざつと鳴ると、上の森へ、雲がかかつたと見るや、こらえずさつと降出したのに、ざつと一濡ひとぬれ。石段を駆かけて上のぼつて、境内けいだいにちらほらとある、青梅あおうめの中を、裳もすそはらはらでお君くぐが潜くぐつて。さてこの額堂へ入つて、一息ついたのである。

「暮れるには間まがあるだろうが、暗くなつたもんだから、ここを一番と威おどすんだ。悪い鼻はなさ。この森にや昔からたくさん居る。良いい月夜なんぞに來ると、身体からだが蒼あおい後光がさすように薄うすぼんやり

した態なりで、樹の間にむらむら居る。

それをまた、腕わんぱく白の強がりがが、よく賭博かけなんぞして、わざとここまで来たもんだからね。梟しさいは仔細さいないが、弱るのはこの額堂おににや、古ふるくから評判の、鬼、

「ええ、」

とまた擦寄すりよつた。謙造けんぞうは昔むかし懐なつかしさと、お伽とぎばなし話なしでもする気とで、うっかり言つたが、なるほどこれは、と心着いて、急いで言い続けて、

「鬼の額あがだよ、額あがが上あっているんだよ。」

「どこにでございます。」

と何なんにか押向おしむけられたように顔を向ける。

「何、何でも無い、ただ絵なんだけれど、小児こどもの時は恐かったよ、見ない方がよからう。はははは、そうか、見ないとなお恐おそろしい、

気が済まない、とあとへ残るか、それその額ぬかさ。」

と指ゆびさしたのは、蜘蛛くもの囿いの間にかかつて、一面漆うるしを塗ぬったよう

に古い額ぬかの、胡粉ごふんが白くくつきりと残った、目隈めぐまの蒼あざずんだ中に、

一いっ双虎そうとらのごとき眼まなこの光な、凸なに爛な々らんらんたる、一体いの般はん若にや、被かの

外おへ躍どり出いでて、虚空こくうへさつと撞しゆ木もくを楫かじ、渦うずいた風かぜに乗まつて、

緋ひの袴はかまの狂くるいが火焰ほのおのように翻ひるつたのを、よくも見みないで、

「ああ。」と云うと、ひしと謙造けんぞうの胸むねにつけた、遠慮えんりよの眉まゆは間あを

をおいたが、前髪えもんは衣紋えもんについて、襟えりの雪ゆきがほんのり薰かると、袖そで

に縫ぬった手にばかり、言い知らず力ちからが籠こもった。

謙造は、その時はまださまでも思わずに、

「母^{おつかさん}様の^{かたみ}の記念を見に行くんじゃないか、そんなに弱くつては

仕方がない。」

と半ば^{はげ}励ます気で云つた。

「いいえ、母^{おつかさん}様が^い生きていて下されば、なおこんな時は^{あま}甘え

ますわ。」

と取^{とりすが}継つているだけに、思い切つて、おさないものいい。

何となく身に染みて、

「私が^い居るから恐くはないよ。」

「ですから、こうやって、こうやって居れば恐くはないのでござ
います。」

思わず背せなに手をかけながら、謙造は仰いで額を見た。

雨の滴したたり々しとしとと屋根を打つて、森の暗さが廂ひさしを通し、翠みどりが黒く染込む絵の、鬼女きじよが投げたる被かざきを背せにかけ、わずかに烏帽えぼ子しの頭かしらを払はらつて、太刀たちに手をかけ、腹巻したる体たいを斜ななめに、ハタと睨にらんだ勇士おもての面。

と顔を合わせて、フトその腕かいなを解いた時。

小松こまつに触さわる雨の音、ざらざらと騒さわがしく、番傘ばんがさを低ひかく翳かげし、高下駄たかげたに、濡地ぬれつちをしやしやしやきと踏ふんで、からずね二本、痩せたのを裾端折すそはしよりで、大股おおまたに歩あるいて来て額堂いただきへ、頂たの方たの入口から、のさりと入ったものがある。

八

「やあ、これからまたお出かい。」

と腹の底から出るような、奥底のない声をかけて、番傘を横に開いて、出した顔は見知越みしりごし。一昨日おとといもちよつと顔を合わせた、峰みねの回向堂の堂守で、耳には数珠じゆずをかけていた。仁右衛門にえもんといつて、いつもおんなじ年の爺おやじである。

その回向堂は、また庚申堂こうしんどうとも呼ぶが、別に庚申を祭つたのではない。さんぬる天保てんぽう庚申年に、山を開いて、共同墓地にした時に、居まわりに寺がないから、この御堂みどうを建こんりゆう立りゆうして、家々の位牌いはいを預ける事にした、そこで回向堂とも称とうるので、この

堂守ばかり、別に住職の居室もなければ、山法師も宿らぬのである。

「また、東京へ行きますから、もう一度と思つて来ました。」
 と早、離れてはいたが、謙造は傍なる、手向にあらぬ花の姿に、心置かるる風情で云つた。

「よく、参らつしやる、ちとまた休んでござれ。」

「ちよつと休まして頂くかも知れません。爺さんは、」

「私かい。講中にちつと折込みがあつて、これから通夜じゃ、南無妙、」

と口をむぐむぐさしたが、

「はははは、私ぐらいの年の婆さまじゃ、お目出たい事いの。位

牌になつて嫁入りよめいにござらつしやる、南無妙。戸は閉めてきたがの、開けさつしやりませ、掛金かけがねも何にもない、南無妙、」
と二人を見て、

「ははあ、傘かさなしじやの、いや生憎あいにくの雨、これを進ぜましよ。
持つてござらつしやい。」

とばツさり窄すぼめる。

「何、構やしないよ。」

「うんにやよ、お前さまは構わつしやらいでも、はははは、それ、そちらの※ねえさんが濡れるわ、さあさあ、ささつしやい。」

「済みませんねえ、」

と顔を赤らめながら、

「でも、お爺さん、あなたお濡れなさいましょう。」

「私は濡れても天日てんぴで干すわさ。いや、またまこと困れば、天神

様のかんぬしどのべっこん神官殿別懇おっじゃ、宿坊しゆくぼうで借りて行く……南無妙、」

と押つけるように出してくれる。

きさき捧げるように両手で取って、

「大おおだすか助りです、ここに雨やみをしているもいいが、この人が

と見返って、莞爾にっこりして、

「どうも、嬰兒ねんねのように恐がって、取って食われそうに騒ぐんで

と今の姿を見られたろう、と極きまりの悪さにいいわけする。

と今の姿を見られたろう、と極きまりの悪さにいいわけする。

お君は俯向うつむいて、紫むらさきの半襟はんえりの、縫ぬいの梅うめを指でちよいと。
仁右衛門にえもん、はッはと笑い、

「おお、名物の梟うすかい。」

「いいえ、それよりか、そのもみじ狩がりの額の鬼が、」

「ふむ、」

と振仰いで、

「これかい、南無妙。これは似たような絵じやが、余吾將軍よごしようぐんこれ

維茂もちではない。見さつしやい。烏帽子素袍大紋えぼしすおうだいもんじや。手には小

手て、脚あしにはすねあてあてをしているわ……大森彦七おおもりひこしちじや。南無妙

、

と豊かに目を瞑つぶつて、鼻の下を長くしたが、

「山やまぎわ 類の細道を、直すくさま 様に通るに、年の程十七八ばかり 計なる女にようほ
 房うの、赤き袴はかまに、柳やなぎうら 裏の五いつつぎぬ 衣着て、鬢びんか 深く鍛そぎたるが、
 南無妙。

山の端はの月に映えいじて、ただ独たたずりイみたり。……これからよ、南
 無妙。

女ちと打笑うれうて、嬉うれしや候。さらば御おん棧さじき敷へ参そうらり候わんと云
 いて、跡あとに付つきてぞ歩みける。羅ら綺きにだも不たえざる勝すがた姿まこと、誠ものいに物
 痛たわしく、まだ一足も土をば不ふまざる踏ひと人よと覚えて、南無妙。

彦七こらえず 不あまり 怵つゆ、余あまに露つゆも深く候えば、あれまで負おいま進いらせ候わん
 とて、前ひざまずに跪ひざまずきたれば、女房うしろすこしも不じせ辞ず、便びんのう、いかにかと
 云いながら、やがて後よりにぞ靠かかりける、南無妙。

白玉か何ぞと問いしいにし古えも、かくやと思おも知れつつ、嵐のつあらし
 てに散ちるはな花の、袖に懸かかるよりも軽やかに、梅花の匂ばいかになつかしく、
 踏ふむあし足もたどどしく、心も空に浮うかれつつ、半はんちよう町まちばかり歩み
 けるが、南無妙。

月すこし暗かりける処にて、南無妙、さしも厳いづくしかりけるこの
 女房、南無妙。」

と、いいいい額堂を出ると、雨に濡らすまいと思つたか、数珠を
 取つて。頂ふところいて懐へ入れたが、身からだ体は平気で、石段、てく、てく。

九

フタツマナコシユトイ。二ノ眼ハ朱ヲ解テ。鏡ノ面ニ洒ゲルガゴトク。ウエシタ上下齒クイ違チゴウテ。クチワキ口脇耳ノ根マデ広ク割ケ。マユウルシ眉ハ漆ニテ百入塗タルゴトクニシテ。額ヲ隠シ。フリワケガミ振分髪ノ中ヨリ。ゴスンバカリ五寸計ナル犢ノ角。ウロコ鱗ヲカズイテ生出おいでた、たけしやく長八尺の鬼が出ようかと、汗あせを流して聞いている内、月チト暗カリケル処ニテ、仁右衛門が出て行つた。ま
ず、よし。お君は怯おびえずに済んだが、ひとえに鼻の声に耳を澄ま
して、あわれに物ものさびし寂い顔である。

「さ、出かけよう。」

と謙造はもうここから傘からかさばツさり。

「はい、あなた飛んだご迷惑めいわくでございます。」

「私はちつとも迷惑な事はないが、あなた、それじゃいかん。路みち

はまだそんなでもないから、はだし跣足には及ぶまいが、裾をぐいとお上げ、構わず、

「それでも、」

「うむ、構うもんか、いまの石段なんぞ、ちらちらひっから引絡まつてあるきにく歩行悪そうだった。

きまり極の悪いことも何にもない。誰も見やしないから、これから先は、人ツ子一人居やしない、よ、そうおし、」

「でも、あんま余り、」

かたづま片褻取つて、くれないその紅のはしのこぼれたのに、ためら猶予つてはずか恥しそ
う。

「だらしがないから、よ。」

と叱しかるように云つて、

「母おつかさん様に逢いに行くんだ。一体、私の背せなかに負おんぶをして、目を塞ふさいで飛ぶところだ。構うもんか。さ、手を曳ひこう、迂すべるぞ。」
 と言つた。暮れかかった山の色は、その滑なめらかな土に、お君の白し脛らはぎとかつ、緋ひの裳もすそを映した。二人は額堂を出たのである。

「ご覧、目の下に遠く樹立こたちが見える、あの中の瓦屋根かわらやねが、私の居はたごる旅籠はたごだよ。」

岨がけのふちで危あぶなつかしそうに伸上のびあがつて、

「まあ、直じきそこでございますね。」

「一ひととつと飛びだから、梟ふくろうが迎いに来たんだろう。」

「あれ。」

「おつと……番ばんご毎ごと怯おびえるな、しつかりと掴つかつたり……」

「あなた、邪じゃ慳けんにお引張ひっぱりなさいますな。綺麗きれいな草を、もうちつとで踏ふもうといたしました。可愛かわいらしい菖蒲あやめですこと。」

「紫羅傘いちはつだよ、この山にはたくさん吹さく。それ、一面に。」

星の数ほど、はらはらと咲き乱れたが、森が暗く山が薄うす鼠ねずみ

になつて濡れたから、しきりなく梟ねこの声につけても、その紫おもの梯かげが、燐火おにびのようすこで凄こかつた。

迎たどる姿は、松にかくれ、草にあらわれ、坂しずに沈しずみ、峰たけに浮んで、その峰たけつづきを畝うね々と、漆しのようなのと、真蒼まさおなると、赭しやのご

ときと、中にも雪を頂かみいた、雲ういろいろの遠と山おやまに添そうて、ここいに射返いかえされたようきみなお君きみの色。やがて傘かさ一つ、山はの端おに大おな蕈きさびらの

ようになつた時、二人はその、さす方の、こうしんどう 庚申堂へ着いたのである。

と不思議な事には、堂の正面へ向つた時、仁右衛門は掛金はな
 いが開けて入るように、と心着けたのに、雨戸は両方へ開いてい
 た。お君は後に、のち、御母様おつかさんがそうしておいたのだ、と言つたが、
 知らず堂守の思おも違いちがひであつたろう。

かまち 框えんがすぐに縁とつで、取附とつきがその位牌堂。これには天てん井じから
 大きな白とぼりの戸帳たが垂たれている。その色ほのかだけ灰ほのかに明くつて、いたじき 板敷
 は暗くかつた。

左しやうに六畳じやうばかりの休息所がある。向むかうが破やれ襖ふすまで、その中なかが、
 何畳なにじやうか、仁右衛門堂守にえもんどうしの居いる処。勝手口かたてぐちは裏うらにあつて、台所だいしよもつ

いて、井戸いどもある。

が謙造の用は、ちつともそこいらにはなかつたので。

前へ入つて、その休息所の真暗な中を、板戸漏もる明あかりを見当に、

がたびしと立働いて、町に向いた方の雨戸をあけた。

横手にも窓があつて、そこをあけると今の、その雪をいただい

た山が氷こおりを削けずつたような裾を、紅、緑、紫の山でつつまれた根ま

で見える、見晴の絶景ながら、窓の下がすぐ、ばらばらと墓であ

るから、また怯おびえようと、それは閉めたままでおいたのである。

十

その間に、お君は縁側に腰をかけて、裾ねじを捻ねじるようふところにして懐はきなが
 みで足を拭ぬぐつて、下駄げたを、謙造のも一所ふに拭ぬぐいて、それから穿はきな
 直おして、外へ出て、広々とした山の上の、小さな手水鉢ちようずばちで手
 を洗ぬぐつて、これは手巾ハンケチで拭ぬぐつて、裾をおろして、一つ揺ゆすり直な
 して、下したづま褌かひこを搔か込んで、本堂へ立向つむりつて、ト頭つむりを下げたところ。
 「こちらへお入り、」

と、謙造が休息所で声をかける。

お君がそつと歩ある行あるいて行くと、六畳の真中に腕うでぐみ組ぐみをして坐すわ
 ていたが、

「まあお坐すわんなさい。」

と傍かたわらへ坐すわらせて、お君が、ちゃんと膝をついた拍ひょうし子しに、何と

思つたか、ずいと立つてそこらを見廻したが、横手のその窓に
 並んだ二段に釣つた棚があつて、火鉢燭台の類、新しい卒堵
 婆が二本ばかり。下へ突込んで、鼠の嚙つた穴から、白い切のは
 み出した、中には白骨でもありそうな、薄気味の悪い古葛籠が
 一折。その中の棚に斜つかけに乗せてあつた経机ではない小
 机の、脚を抉つて満月を透したはいいが、雲のかかったように虫
 蝕のあとのある、塗つたか、古びか、真黒な、引出しのないの
 に目を着けると……

「有つた、有つた。」

と嬉しそうにつと寄つて、両手でがさがさと引き出して、立直
 つて持つて出て、縁側を背後に、端然と坐つた、お君のふつくり

した衣紋えもんつきの帯の処へ、中腰になつて昇据かきすえて置直すと、正面を避さけて、お君と互たがい違ちがいに肩を並べたように、どつかと坐つて、

「これだ。これがなかりうもんなら、わざわざ足弱を、暮くれ方がたにはなるし、雨は降るし、こんな山の中へ連れて来て、申訳のない次第だ。

薄暗くつてさつきからちよつと見つからないもんだから、これも見た目の幻まぼろしだったのか、と大抵たいてい氣を揉もんだ事じゃない。

お君さん、」

と云つて、無言ながら、懐なつかしげなその美しい、そして恍うつつ惚とりとなつてゐる顔を見て、

「その机だ。お君さん、あなたの母おつかさん様の記念かたみというのは、：

：

こういうわけだ。また恐こわがつちやいけないよ。母おつかさん様の事な

んだから。

いいかい。

一昨日おとといね。私の両親ふたおやの墓は、ついこの右の方おかの丘まつかげの松蔭かげに

あるんだが、そこへ参詣おまいりをして、墳墓はかの土かおりに、薫すみれの良みもとい、堇すみれの

花みもとが咲おやしいていたから、東京へ持おやしつて帰おやしろうと思おやしつて、三本おやしばかり

摘おやしんで、こぼれ松葉おやしと一所おやしに紙入おやしの中おやしへ入おやしれて。それから、父親おやし

の居おやしる時おやし分おやし、連立おやしつて阿母おふくろの墓はかまいり参おやしをすると、いつでも帰おやしり

がけには、この仁右衛門おやしの堂おやしへ寄おやしつて、世間話おやし、お祖師おやし様の一代おやし

記、時によると、軍談講釈、太平記を拾いよみに諳記そらでやるくら

い話がおもしろい爺様じいさまだから、日が暮れるまで坐り込んで、提ち

ようちん

灯を借りて帰ることなんぞあつた馴染なじみだから、ここへ寄つた。

いいお天気で、からりと日が照つていたから、この間あいだじゆう中の

しつけばら

湿気しつけばら払いだと見えて、本堂も廊下ろうかも明つ放し……で誰も居だれない。

座敷ざしきのここにこの机が出ていた。

机の向うに薄くこう婦人おんなが一人、

お君はさつと蒼くなる。

「一生懸命にお聞きよ。それが、あなたの母おつかさん様さまだつたんだか

ら。

高たかまげ髻うつつむを俯向けにして、雪のような頸えりあし脚あしが見えた。手をこう

やって、何か書ものをしていたろう。紙はあつたが、筆は持つていたか、そこまでは気がつかないが、現に、そこに、あなたとちようど向い合せの処、」

正面の襖ふすまは暗くなつた、破れた引手ひきてに、襖紙の裂けたのが、ばさりと動いた。お君は堅かたくなつて真直に、そなたを見向いて、瞬またたきもせぬのである。

「しつかりして、お聞き、恐くはないから、私が居るから、」と謙造は、自分もちよいと本堂の今は煙けむりのように見える、白き戸帳とばりを見かえりながら、

「私がそれを見て、ああ、肖にたようなどぞつとした時、そつと顔を上げて、莞爾にっこりしたのが、お向うのその※ねえさんだ、百人一首の

挿画さしえにそツくり。

はツと気がつくくと、もう影も姿もなかった。

私は、思わず飛込んで、その襖を開けたよ。

がらん堂にして仁右衛門も居らず。懐しい人だけでも、そこに、と思うと、私もちと居なすった幻のあとへは、第一なまぐさを食う身体からだだし、もつたいなくツて憚はばかったから、今、お君さん、お前が坐っているそこへ坐つてね、机に凭もたれて、」

と云う時、お君はその机にひたと顔をつけて、うつぶしになつた。あらぬ倂おもかげとどめずや、机の上は煤すすだらけである。

「で、何となく、あの二階と軒のきとで、泣きなすった、その時の姿が、今さしむかいに見えるようで、私は自分の母親の事と一所に、

しばらく人知れず泣いて、ようよう外へ出て、日を見て目を拭ふいた次第だった。翌あくるばん晩、朝顔を踊った、お前さんを見たんだよ。
めさき目前を去らない娘むすめさんにそっくりじゃないか。そんな話だから、酒の席では言わなかったが、私はね、さつきお前さんがお出いでの時、女中が取次いで、女の方だと云った、それにさえ、ぞつとしかくらしい、まざまざとここで見たんだよ。

しかしその机は、昔からここにある見覚えのある、庚申堂はじまりからの附道具つきどうぐで、何もあなたの母おっかさん様の使っておいでなすつたのを、堂へ納めたというんじゃない。

それがまたどうして、ここで幻を見たらうと思うと……：……こんなんだ。

私の母親の亡くなつたのは、あなたの母親より、二年ばかり前だつたらう。

新盆にいぼんに、切籠きりこを提さげて、父親おやじと連立つつて墓はかまいり参まゐり来たが、その白張しらはりの切籠きりこは、ここへ来て、仁右衛門にゑもん爺ぢいさま様に、アノ威張いばつた髯ひげ題目だいもく、それから、志しす仏ぶつの戒かい名みやう、進しん上じやうから、供養くじやうの主ぬし、先祖代々の精しやうりやう霊りやうと、一個一個ひとつひとつに書いて貫もらうのが例れいでね。

内うちばかりぢやない、今でも盆ぼんにはそうだろうが、よその爺ぢいさま様さま、切籠持参きりこぢいさまは皆みなそうするんだつけ。

その年としはついにない、どうしたのか急病きゆうびんで、仁右衛門にゑもんが呻うめいていました。

さあ、切籠が迷った、白張でうろうろする。

ト同じ燈籠とうろうを手に提さげて、とき色の長襦袢ながじゆばんの透いて見える、

うすものすず
羅なの涼しい形なりで、母娘連おやこづれ、あなたの祖おばあさん母と二人連で、ここ

へ来なすつたのが、※ねえさんだ。

やあ、占しめた、と云うと、父親おやじが遠慮なしに、お絹きぬさん——あ

なた、母おつかさん様の名は知しっているかい。」

突俯つツプしたまま、すねたように頭かぶりを振ふった。

「お願ねがいだ、お願ねがいだ。精霊大まごつきのところ、お馴染わしの私わしが媽かかあ々々

の門札かどくだを願ねがいいます、と燈籠とうろうを振廻ふりまわしたもんです。

母おつかさん様は、町内評判の手かきだったからね、それに大勢居る

処ところだし、祖母おばあさんがまた、ちつと見せたい気もあつたかして、書

いてお上げなさいよ、と云つてくれたもんだから、扇おうぎをたたいで、お坐まんなすつたのが——その机こです。

これは、祖父じいの何々院なににないん、これは婆おやじさまの何々なににないん 信にん 女にょ、そこで、これへ、媽かかあ々の戒名かいめいを、と父親おやじが燈籠とうろうを出した時。

(母おつかさん 様さま のは、) と傍そばに畏かしこまつた私わたしを見て、

(謙けんちゃんちゃんが書かくんくんですよ、)

とそう云いつておくおくんなすつてね、その机この前まへへ坐まらせて、
と云いう時とき、謙けん造ぞうは声こゑが曇くもつた。

「すらりと立たつて、背後うしろから私わたしの手てを柔やわらかく筆ふでを持もつ添そえて……
おつかさん、と仮名かなで書かかして下くださる時とき、この襟えりへ、
と、しつかりと腕うでを組くんで、

「はらはらと涙を落^{なみだ}しておくんなすった。

おやし^{すみ}父親は墨をすりながら、伸^{のびあが}上^{あが}つて、とその仮名を讀んで……

おつかさん、」

いいかけて謙造は、ハツと位牌堂の方を振向いてぞつとした。

自分の胸か、君子の声か、幽^{かすか}に、おつかさんと響いた。

ヒイト、堪^{こら}えかねてか、泣く声して、薄暗^{くさ}がりを一つあおつて、

白い手が膝の上へばたりと来た。

突俯^{つツぶ}したお君が、胸の苦しさに悶^{もだ}えたのである。

その手を取つて、

「それだもの、忘^わ、忘^{わす}れるもんか。その時の、幻が、ここに残つて、私の目に見えたんだ。

ね、だからそれが記念かたみなんだ。お君さん、母おつかさん様の顔が見え

たでしょう、見えたでしょう。一心におんななさい、私がきつと請うけあ合あう、きつと見える。可哀相かわいそうに、名、名も知らんのか。」

と云つて、ぶるぶると震ふるえる手を、しつかと取つた。が、冷いので、あなやと驚おどろき、膝つっを突かけ、背せなを抱いだくと、答こたえがないので、慌あわてて、引ひ起おして、横抱よこだきに膝ひざへ抱いだいた。

慌あわしい声こゑに力ちからを籠こめつつ、

「しつかりおし、しつかりおし、」

と涙ながら、そのまま、じつと抱だしめて、

「母おつかさん様の顔かほは、※ねえさんの姿すがたは、私の、謙造けんぞうの胸むねにある！」

とじつと見詰みづめると、恍うつつ惚とりした雪ゆきのようなお君おきみの顔かほの、美うつくし

く優しい眉まゆのあたりを、ちらちらと蝶ちようのように、紫の影が行交ゆきかう
 と思うと、堇すみれの薫かおりがはつとして、やがて縋すがった手に力が入った。
 お君の寂しく莞爾にっこりした時、寂じやく寞まくとした位牌堂の中で、力
 タリと音。

目を上げて見ると、見渡す限り、山はその戸帳とぼりのような色にな
 った。が、やや艶つややかに見えたのは雨が晴れた薄月の影である。
 遠くで梟なが啼いた。

謙造は、その声に、額堂の絵を思出した、けれども、自分で頭かぶり
 をふって、斉ひとしく莞爾にっこりした。

その時何となく机の向が、かわった。

襖がすらりとあいたようだから、振返えると、あらず、仁右衛

門の居室いままは閉しまったままで、ただほのかに見える散こぼれ松葉のその模様が、懐なつかしい百人一首の表紙に見えた。

(明治四十年一月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 泉鏡花」筑摩書房

1991（平成3年）10月20日初版発行

1995（平成7年）8月15日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一卷」岩波書店

初出：「新小説」

1907（昭和40）年1月

※底本の編者による語注は省略しました。

入力：牡蠣右衛門

校正：門田裕志

2001年10月19日公開

2018年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

縁結び

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>